

朝永先生と基礎物理学研究所

小林 稔

基研の前身湯川記念館の設立から記念館時代さらに基研への移行後もずっとお世話になった朝永先生が去る7月上旬に逝去されました。そこでこのシンポジュームの冒頭に朝永先生と基研という題で何かお話しをするように要請されましたが、その前にもし皆さんがよろしければ、しばらく一同で朝永先生に黙悼を捧げたいと思います。

(一同起立、黙悼、着席)

ありがとうございました。さて今日は基研の将来についてのシンポジュームですが、年寄りはいつでも昔の話つまり後向きの話しかできません。そこで、朝永先生を偲び、また基研の将来を考えて行くうえで少しでも役立てばと思い、前座をつとめさせていただきます。

基研の設立に際して朝永さんが果たされた役割については今まで何回か書いた基研設立の経緯のなかになり詳しく述べてあります。それで大多数の方は朝永さんの基研におけるご活躍についてご存知のことと思いますが、今では若い方もずい分増えていますので、大部分が重複するでしょうが、そういう話をもう一度くりかえしてみたいと思います。

皆様もご存知のように、基研がつくられる前の1年間は湯川記念館という京都大学の一つの施設だったのです。大学の施設というのは例えば附属図書館のようなものです。記念館というものがそういう形できたのは1952年の夏のことですが、その話がはじまったのはもちろん1949年の秋湯川先生がノーベル賞をお受けになるという報道で日本中が大騒ぎをしたときです。今から考えるとちょっと騒ぎすぎであったと思われるほどですが、それについては当時の時勢というか社会情勢を頭に入れて考えなければならぬでしょう。当時は敗戦直後の混乱がまだ続いており、街には闇市がならんでいて、みんなはまだ食べることに精一杯という時期でした。しかし、敗戦にうちひしがれた国民全体がこれからの日本はどうあるべきかということを真剣に考えはじめたころでもあったのです。朝鮮事変が間もなく始まるのですが、49年というのはそういう年でした。当時、今後のわが国のあり方を模索するなかから、政府をはじめ一般国民の中からわが国は今後文化国家として立つのだという声が次第に高くなり、学術の振興を何よりも優先すべきであるという考え方が国全体にひろがりつつありました。こういう張り切りようもその後の経済成長のなかでいつの間にか失われてしまったようですが、とに角、当時のこういう背景で考えると、わが国の科学者にノーベル賞が受与されるという朗報が如何に大きい歓喜で受けとられたかが想像できるでしょう。

1949年のちょうど文化の日に伝えられたこの朗報を聞いたとたん、当時の京大総長鳥養利三郎先生はこれを記念して京都大学に一つの施設をつくり、そこを根拠として学術振興のための記念事業をおこそうということを考えつかれ、早速学内で記念講演会を開いてその席上この構想を公表されました。一方、日本学術会議でも、学術会議はそのころ今よりずっと強い発言力をもっていたように思いますが、これを記

念して国家的事業をおこすべきだという決議がされ、その勧告をうけて国会でも議決しています。結局これらのことが一つになって、京都大学に記念館をたてるということになったのですが、この経緯からわかるように、京都大学で考えていたことと、学術会議で議論されていたこととにかなりの喰いちがいがあったのです。当時の素粒子論研究者たちの考え方は湯川先生の受賞は全国民のよろこぶべきことであり、この記念事業は当然この分野の全国の研究者の研究を推進させるためのものであるべきだということでした。また当時の研究者がおかれていた環境からみて、研究者が共同の場として利用できる研究機関を要望する声がどれほど切実であったかがうかがわれるでしょう。その辺、研究者の考え方と京大当局といいますか時計台あたりの考え方とは大部喰いちがっており、私共がかなり苦慮したわけです。そして、この調整に朝永さんが一役買って下さったのです。実際、1950年になって京大と文部省の間で予算の交渉が進行しはじめたころ、それが東京あたりの研究者にも伝わり、京都大学では湯川教授を独占して何かやるらしいが湯川神社でもつくって鳥居でもたてるんじゃないかという風な弥次まで出るほどでした。

その頃も研究者の声は学術会議の委員会、素粒子論の分野では核研連（のちに核特委になり、また核研連に戻された）を通じて学術会議に反映されていました。その核研連の委員長が朝永さんだったのです。朝永さんはここで出されるいろいろな意見をまとめるためにずい分苦勞されました。新しい研究機関を国立にすべきだとか、大学の連合が管理運営にあたるべきだとか、その後の核研、高エネルギー研などの設立で出た意見はほとんどこの委員会で出尽していたといつてよいほどです。朝永さんは委員長としてこれらの説を根気よくまとめることに努力し、また文部省とも直接交渉して可能性をさぐっておられたようです。私はこの委員会の委員として、また京大の一員として、京大と核研連とのパイプの役をつとめ、個人的にも朝永さんといろいろ相談しながら調整にあたっていました。湯川先生はその頃まだコロンビア大学の教授としてニューヨークにおられたのですが、こちらの話の進行状況を手紙でお報せしていました。

核研連では記念事業として建つことになった記念館は一応京大の施設とすることに同意が得られましたが、その施設は全国の研究者に開放され、運営にも研究者の意向を反映させるという方向で固まってきました。そこで、委員長の朝永さんに京大へ行ってもらい、総長にこういう研究者の意向を伝えて諒解をとってもらおうということになりました。それより前、そのころ末だホテルもとれなかったもので、われわれが上京すると上野の等覚院というお寺を京大の宿泊所につかっていたのですが、ある朝ちょうど鳥養総長と私それに井上健君が泊り合わせたことがありました。その朝、朝食をとりながらはじめてお昼まえまでかなり長い議論をしましたが、鳥養先生も頭のよい人ですから趨勢を察して、それでは君らのよいように任せるといふ風なことになったのです。話が前後しましたが、核研連ではそういう話では頼りないからということで、委員長の朝永さん、それに幹事でしたか坂田昌一君に京都へ来てもらって、私と3人で総長室へ行き鳥養先生と会見したのです。つまり朝永さんに学術会議の委員長としてきちんと形をつけてもらったわけです。もちろん、われわれが下ごしらえをしてあったので、そこでは何も議論がでずスムーズにおわりました。いまの共同利用研としての基研の性格がこの時にきまったといえましょう。今考えると何でもなように思われるでしょうが、こういう形にするまで大学の自治がおかされることになるとかかなりの抵抗があったようです。

そういうことで、京大内に理学部長の長谷川万吉先生を委員長とする準備委員会の実行委員会ができ、

この建物が1951年の秋に着工されて、52年の夏まえにできあがりました。開館式には湯川先生も一時帰国して出席され、官制としての湯川記念館が発足したのです。その官制にはとくに全国の大学の職員の共同の利用に供するとかいう文句が入ることになりました。記念館といってももちろんみな研究機関と考えていたのですが、助手が2人、事務定員がたしか6人だけで、いまそこへ現われた川口さんとそれから大塚益比古さんがその初代の助手になったのですが、それだけの陣容で一体何をするのかというようなことになったのです。もちろん、研究費や旅費は当時としてはかなり十分につけられていましたが。

そこで館長事務代理であった長谷川万吉先生が（最初から湯川先生に帰国してもらって館長になってもらうという予定があったのでこういうことになっていました）、これは何とかしなければいかんということで、記念館に研究部と事業部をおこうといい出されました。研究部は若い人たちを含めて全国から研究部員をえらび、その人たちに旅費や研究費を配分して記念館の準職員のようにしてもらおうという案で、研究部長には朝永さんをおねがいしようということになりました。朝永さんは最初どういうことか了解されにくかったようですが、最後にそれでは記念館友の会のようなものかといわれて部長を引きうけてくれました。その会合がいまの基研の研究部員会になったわけです。一方、事業部は記念館へくる外国の文献を研究部員に配布するとか、論文の複写、プログレスの刊行、図書室の整備などをやるのが仕事でその委員長には私がなれということで、余りありがたくはなかったのですが引きうけました。それで、京大の物理教室やその周辺の人たちたとえば化学の山本さんらにおねがいして、部員になってもらい、皆で手わけして記念館の事務的なことをやってもらいました。たしか大阪市大の山口さんらにも事業部員会には毎週来てもらっていました。基研に移行して事務機構が整ってから事業部の方は自然に消滅しましたが、今でも研究部員という呼び方が残っているようです。とに角、記念館時代の1年間は湯川先生がおられないので皆でわいわいやっていたわけです。

その夏、コペンハーゲンに行かれた小谷正雄先生から手紙がきました。来年の理論物理の国際会議（そのときはたしかコンファレンスと書いてありましたが）を日本で引うけることになりそうだが、そのサイトとして新しくできた記念館が適当と思う。そちらではこれについてどう考えるか。湯川先生にはアメリカへ廻るのでお話しするつもりだということが書いてありました。われわれもそれは記念館の仕事としてうってつけだと思い、核研連でもそれを推進することになり、学術会議主催という形をとることになりました。

今では大学の設備も整い、ホテルなども十分利用できますが、1953年といえまだ大変な時代で、会議を3系列にわけてやろうということになっても、京大では記念館のほかに使えそうな室もなく、進駐軍が引あげたあとの楽友会館と人文科学研究所とを使わせてもらうことになってからもその修復がなかなかはかどらず気をもんだものです。事業部はこういう次元の低いことに走りまわっていたのですが、研究部長の朝永さんは国際会議を日本でやる以上は出し物の用意が一番大事なんだということで、記念館について予算で準備のための研究会、つまり試験勉強を大いにやるべきだという大号令を出されたのです。まあそれが研究部長のお役目ですから（笑）。そういう研究会は記念館だけでなく、研究者の都合でほかでもひらかれました。これが後の基研の研究会の型をきめて行ったことになります。

記念館時代というのは一体記念館とは何をするところやというようなことから、国際会議の準備で追われるというようなわけのわからぬあわただしい1年間でしたが、一方ではこれを何とか中味のある研究所

にしようという文部省との交渉の時代でもあったのです。われわれもここへ教授、助教授の定員をつけてくれるように何度も文部省へ足をはこびましたが、朝永さんはこれとは別に学術会議の核研連の委員長として文部省へ働きかけてくれました。その頃の文部省は今とちがってまだやることがなかった時代ですから、文部省はつぶされるかも知れないなどいわれていたころですから、やりやすい点もありました（笑）。われわれが話をもって行くとかえって喜んで一緒に考えてくれたものです。その頃のわれわれの案は5部門ぐらいで、そのほかに他の研究所よりも助手を多くつけるとか、いまの流動研究員のような招へい教授というようなポストも加えるというような案でした。こういう案をもって文部省へ行くと当時の岡野（澄）学術課長から、学術会議からは朝永先生がきて、この研究所の専任のポストは極く少数でよいといっておられたと言われたことをおぼえています。これは当時研究者たちは一般にアメリカのプリンストン研究所のことを例に考えており、朝永さんもプリンストンから帰国して間もなくで、そこでは所員が僅かで大多数は visitor とか Post doctorate の人たちが研究していたことが頭にあったからでしょう。そういうことで、私共が定員はやっぱり20人ぐらい欲しいというと、岡野さんは机の引出しから朝永さんの書いたものを引っ張り出して、あんたの話はちがうよ、朝永さんはこういっていますよと反撥されました。この点ちょっと朝永先生の基研へのネガティブの寄与かも知れませんか（笑）。もちろん、朝永さんは基研が小さくてよいと考えたのではなく、その運営の精神を説きたかったのだと思いますが、うまく逆手をとられたというわけです。（司会者へ）だいぶん時間が超過しましたか。あと5分か10分で締めくくりましょう。

今日も基研の将来ということで議論されるわけですが、基研その前身の湯川記念館の時代からこういう議論はたえずおこなわれていたのです。なにしろ基研という形態はそれ以前に何も手本がなく、最初から手さぐりで試行錯誤をくりかえしていまの形態をつくってきたのですから。したがって、これからも今までのよい所は残すようにして思い切って変えて行かれてよいのです。基研にはご存知のように運営委員会というのがあり、これは記念館時代からあるのですが、ここが事実上研究所の管理運営をきめているのですが、もちろん朝永さんは記念館時代からずっとその委員をつとめておられました。朝永さんの持論は一般に研究所というものは古くなると必ず沈滞して行くから、ここはいつまでもフレッシュに保つようにしなければならないということでした。それで、よくここで問題になる任期制というものが出てきたわけです。そして任期制をとるのであればシビヤーにやらんとあかんということになりました。そういう議論のなかで朝永さんは研究所自身にも定年制を考えたらどうだろうかという発言もあったように覚えています。まあ20年か30年経ったら研究所の任期がきて解散（笑）、その時期にまた何か新しい構想で考えればよいのだというような考え方です。そういう非常に自由な議論をして、とくに若い人たちの多かった研究部員会、そのこのメンバーは大学を出てまだ2～3年という人たちがかなりの数をしめていましたが、その委員会でもかなり激しい議論の結果、結論としては教授も含めて任期をつけるということになったのです。助手は非常に短く3年士いくらでしたか、とに角この助手はよい大学院に入ったつもりできてもらおう、そして来てもらう人にはどこからもひっぱりだこになる人をえらべば心配がないだろうということでした。そして、助手を公募し、内定した人には朝永さんが1人ずつ会って、大学院に入ったつもりで2～3年の間によい立派な仕事をしてでて行きなさいと説教することになりました。私は立ち合っていないが

小林 稔

その時分の助手の方は覚えておられるかも知れません。それから、教授には木庭さんや早川さん、少しおくれて松原さんがこられ、こういうメンバーで発足したのです。もちろん、基研発足と同時に湯川先生が帰国して所長になりました。このポストは任期なしということで、ほかにも副所長格で任期のない教授も考えた方がよいという議論もありました。

基研はいまでも素粒子原子核 3 部門、物性論 1 部門ということになっていますが、これは発足の当初、その設定のいきさつからみてすべて素粒子論でもよかったわけですが、素粒子論グループだけではいつも議論が沸騰してまとまりがつかないので、それに物性の皆さんには紳士が多いから、物性も加えた方がスムーズに行くだろうというような配慮もあったのです。もちろん、学問上も素粒子だけに固るより分野をひろげておかねばならないという大義名分があったのは当然ですが。こういうことを考えましてまだアメリカにおられた湯川先生にご相談して快諾を得たのです。たしかそこにおられる牧さんからかどうして基研に物性論 1 部門が要るのかと喰ってかかれたことを覚えています(笑)。まあ 70 才を越すと何をしゃべっても別に叱られませんので何でもしゃべりますが(笑)。それでは皆さんに笑っていただいたところで終ることにしましょう。

(拍手)

佐藤： どうもありがとうございました。何んかこの際ぜひお聞きしておきたいということがありましたら。

山口： 小林先生のおっしゃったことで、一つだけ僕の知っている経験とちがうところがありますので、申し上げたいのですが。任期をつけるという議論を我々若手が持ち出しましたところが、朝永先生はじめ、坂田先生も「おまえ達は嫁さん、子供がなくて家庭の苦しみを知らんからそういう景気のいいことを言う」と。それが、まあ個人的な意味で一つ。もう一つは「大学とか研究所とかいう所は、非常に長い間、研究計画をすすめるものであって、5年で大事業ができるなんておこがましい。だからその教授に任期をつけるというのはとんでもないことである。例えば、アメリカでいうならば Post Doc. にあたる助手に任期をつけるのはもっともであるけれども、その教授・助教授に任期をつけるのはどうであろうか。おまえたち、30になって嫁さん、子供ができれば考えがかわるにちがいない」と(笑)。しかし、考えてみると、僕のまわりにいる人、例えばその教授になった早川氏だって30以前、独身時代に基研に来たわけです。そこで、「若い間はそれでよからうからやってみようではないか」といったんで、むしろ、我々が突き上げた為に、あの朝永先生や坂田先生それから小林先生が、ある意味で、しぶしぶ「まあ任期をつけてやってみるのもよからう(笑) おまえたち少し年とれば、考えが変わるだろう」とおっしゃった。私は、ふざけたようにとられると困りますけれども、本当は完全に意見が対立したんです。ところが、いっぺんそれが認められま

すと、湯川先生がしぶられるのを、小林先生、坂田先生、朝永先生が説得された。こういう形で発足するということを、どういう形でごまかされたのかは存じませんが（笑）。"朝永先生が強行に"とおっしゃったけれどもその前に実は歴史があったということを申し上げたいわけです。

小林： どうも、その辺だいぶん決まったことだけしか話ませんでしたので。

山口： 我々基研を作ったときには、要するに我々が規則を作るという考えがあったんです。ところが、基研 25 年たちますと、規則は研究者以前に存在するというようなニュアンスになって、さわっちゃあいかなという気があるらしいんですね。そのことは基研の発足の主旨に反するんじゃないか。

小林： 今、山口さんから話が出まして、もちろん私は、決まったことだけでしゃべってしまって、もう少しその根からしゃべらなければいけなかったんですが。助手については、これはもうはじめからだいたい了解があり、つまり大学院の学生程度と、まあ、全国から非常に優秀な人を集めるんだけれども、そのつもりでやってもらおうということは、決まったんですが、確かに今おっしゃったことは裏話の更に裏話かもしれませんが、かなり議論があったところです。そういう議論の中で、今の研究所の任期という話まで出たんですけれども、これはまあ半ば冗談にでただけでした。その時に、やはり社会情勢があのようにございましたから、今おっしゃったように、例えば家はどうするんだろうとか、まあそれはなんとかして宿舎を建てれば何んとかなるだろうてな考え方、それが結局建たなかったわけですが、子供の教育がどうだとか、まあ随分議論はありました。確かに。しかし結論としてそうなったと。確かこれは基研が発足する前にだいたい決まっておりました。湯川先生が帰ってこられたのは基研が発足した時ですから。だいたいそれまでに、ここは全国の共同の研究の場で、ここへ来る人は、全国の研究者の代表として来ているという意味で、ここにずっと、パーマネントには居れないということは、研究部員会で何回も議論していました。それで、その時に、そういう運営は大変しんどいだろうというんで、確か山口さんなんか湯川先生が帰ってこられて、これでいいとおっしゃるだろうか、とだいぶ心配していた。私はまあ"まかしてもらってやっているんだから、決めとけばええやないか"というような調子で済ましたわけです。まあそういうことがございまして、今のは大変うわつつらの話をしましてすみませんでした。

佐藤： その他に何か。

吉川： 川口先生に、今、朝永先生が説教なされたとお聞きしたんで、どんな説教かと思って。

小林： 川口さんは、基研の いや記念館の初代助手やから。川口さん、あんた知ったはるか。

川口： はい（笑）。記念館時代の第一号助手でございました。あの御目見えの時にですね、朝永先生から、だいたい小林先生がおっしゃった様な主旨の事を説教されたというか承まりました。

佐藤： 小林先生どうもありがとうございました。それでは時間がありませんので。次に宮本先生、お願いします。